

近未来コンクリート研究会
第3回 RC 構造物の延命化のための維持管理技術協議会（M 協議会）
議事メモ

日時：平成31年3月12日 10:00~12:00

場所：コンクリートメンテナンス協会会議室

議事メモ：以下の通り

○十河代表より

- ・2019年総会を4月19日に開催する
- ・3協議会の各主査より、活動報告を20分程度行い、質疑応答時間も設ける。
- ・次年度は具体的な行動に移すことを念頭に置いた活動を目指す。

○市民からの理解

- ・市民に対しての講座を開くことが効率的（市町村発信もしくは大学からの発信によって、市民に対し維持管理予算の話聞いてもらう場を設ける。）
- ・技術者には維持管理という名称になじみがあるが、一般市民にとって維持管理とは当然の行政サービスととらえられているかもしれない。認識に相違があることを理解しなければならない。
- ・メンテナンスだけよりも防災・減災を交えた内容としたほうが市民の関心を引きやすい

○構造物の余寿命、LCCについて

- ・新示方書では、100年スタート（一昔前は、コンクリートは永久橋でスタートしている）
- ・明石海峡大橋を例にした場合、当時100年
- ・明石海峡大橋で用いたスラグやフライアッシュを多用した混合セメントでは、かぶり厚さ100mmで配合によっては120年中性化しない計算となった。
- ・設計上100年で部材が破壊するという指標はない。
- ・建築では、維持管理を含めて100年以上としている。
- ・鋼橋のLCCは比較的精度よく算定できるが、コンクリート橋のLCCは算定困難。
- ・これまでの主な架け替え理由は劣化ではなく機能不足が主である。
- ・補修設計時に残存供用年数を設定しなければLCCの算定のしようがないが、現状では残存供用年数が明示されることはほとんどない。本来は考慮すべき。
- ・例えば電気防食工法の選定理由として、イニシャルコストでは高価であるがLCCを考慮すると有利となって選定されている場合がある。

○点検、対策

- ・発注者、受注者、点検者、作業員などの技術レベルに差がある。技術者レベル向上が必要であり、同じ損傷を同じように判断できるための共通認識が必要である。
- ・同じ点検業者が同じレベルで点検し判定をしたとしても、発注者側の維持管理に掛けられる予算に応じて優先順位を下げなければならない実情がある。
- ・今の点検後の対策は、損傷レベルがⅢやⅣの優先度を高くして選別しているだけで、余寿命の検討を

行っているわけではない。

- ・町村合併等により管理不能となっている現状がある。
- ・点検によって対策要否をスクリーニングするはずだが、点検することで手いっぱいスクリーニングとなっていない。
- ・対策の優先順位が決められない。または決める人がいない。
- ・維持管理には現場毎の変更増減が著しく、予算計画通りにいかないことが多い。

○道路橋の管理マップ作成について

- ・政令指定都市には、点検した結果を基に管理を行うシステムは構築されているはずである。膨大な量の橋梁を維持管理していくために市町村もの同様にシステム化していく必要があるが、町村では少ない人員ですべての仕事を実行していかなければならないため、多くは発注のみになってしまう場合が多い。

○ひび割れ注入材料の数量について

- ・ひび割れ注入工における注入材料の設計数量と使用実績との差異に関する話題提供をいただいた。

○次回

- ・総会 4月19日（金）

以上